
魔王城の日常

水綴堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王城の日常

【Nコード】

N4455J

【作者名】

水綴堂

【あらすじ】

逃亡する魔王、追う近衛騎士

きよろきよろと辺りを見回し、おまけに警戒術式まで展開して周囲に誰もいないことを確認し、青年は長い黒髪を翻しながら三階の窓から外へ、軽々と飛び降りた。

巡回の騎士を隠れてやり過ごせば、他に出会す者は、こちらが堂々としていれば何の疑問もなく脇によけ頭を下げる。

転移陣で移動できれば事は簡単なのだが、魔力制御が苦手な青年が多量の魔力を消費する転移陣を使えば、どうしても魔力の余波がもれ、魔力に敏感な魔術師達にばれる危険性が高い。やっかいなことに陣の残留魔力から易々と移動位置を割り出して追いかけてくれるような魔術師が、この城には数人いるのだ。

だが、城を出てしまえばこっちのもの。

あと少しで逃げ切れる、と青年がつい気を緩めたその矢先、展開し続けていた警戒術式に巡回の騎士がひっかかり、慌てて方向を変える。

——なんであそこにいるんだ?!

今日の巡回時間とルートは把握している。今の時間、あの場所の巡回は既に通り過ぎている予定だった。偶然何か別の理由でずれたとも考えられるが……。

——ばれたか。さて、誰にばれたかな?

宰相か、側近の誰かか、それとも魔術師団長か。

宰相にばれたなら追っ手は誰が……などと考えていると、向かい側からひとりの騎士が歩いてくるのに気付いた。短く整えられた柔らかなような金茶の髪には、見覚えがある。警戒範囲のぎりぎり外か

ら来た為、視認できるまで気付かなかった。相手もこちらに気付いたように近づいてくる。

「このようなところで、いかがなさいました？」

「ただの散歩だ」

にこにこと柔和な笑顔で、語りかけてきた相手に適当に返事をしながら、青年はそのまま彼の横を通り過ぎようとした。が……。

ひゅんっ！

危険を察知して、青年はすばやく横に飛び退いた。一瞬前まで青年がいた地面が軽く抉れ、ぶすぶすと白煙が立ち上っている。金茶の髪の毛の騎士の手にはいつの間にもやら黒光りする鞭が握られており、その握りには銀色の紋様が刻まれ、淡く発光していた。

「あ、あぶなっ！！」

「おや、避けられましたか」

「お前っ！ 今本気で攻撃したなっ？！ その鞭、ザクイーラのじゃないかっ！！」

魔術師団長ザクイーラが愛用する鞭は、その鞭に捕らえられた者の魔力を封じ、ついでに電撃が流れるエグい代物だ。ちなみに電撃の強さは鞭に込める魔力で加減ができる。

「そうです。ザクイーラ様がわざわざ貸して下さったんですよ。魔王陛下捕縛用、に」

うっとりとして鞭に頬擦りする騎士は、はっきりいってアブナイ。なのに隙がないから性質が悪い。

「だから大人しく捕まって下さい、陛下！」

きらん、と騎士の目が光った。

びしびしと容赦なく振るわれる鞭をなんとかかわしながら、魔王は説得を試みた。早くしないと他の騎士たちも集まってくる。というより集まり始めている。

「ちょっと待てユベロス！ お前、俺の近衛騎士だろうが！ 見逃せ！！」

金茶の髪 of 騎士こと、騎士ユベロス。本当に魔王の近衛騎士であり、魔国では最強の騎士と言われていたりする。最も魔術師団長には敵わないのだが。

「すみません陛下、ザクイーラ様の御命令なので」

「なぜ俺よりザクイーラの命令を優先する？！」

「愛ゆえです！」

きっぱりはっきり断言された。

ユベロスがまだ魔術師団長になる前のザクイーラに完膚なきまでに敗れて以来、心酔というか崇拜というか、ともかく懸想しているのは周知の事実。愚問だったと魔王も思う。

「それに陛下を捕まえたらご褒美を下さると」

仄かに頬を紅潮させるユベロスに、ぞわっと魔王の背筋に悪寒が走った。

ユベロスはそれなりに美形だが、長身でしっかり筋肉もついている男だ。そんな男が目を潤ませて顔を赤くするところなど、見たくもない。これが可憐な美少女や妖艶な美女なら大歓迎なのに。

——だが、さてよ？　これは使えるか？

ユベロスが言う『ご褒美』が普通の褒美と違うのも、魔王城限定で周知の事実。魔王城限定なのは近衛騎士に憧れる一般魔族達の夢を壊さない為である。

「聞け、ユベロス！　ここで俺を逃がせば、『ご褒美』よりも激しく『お仕置き』してもらえるぞ？　そっちの方が良くはないか？」

騎士ユベロス。魔王の近衛騎士にして魔国最強の騎士。魔術師団長の下僕にして八つ当たり要員。本人曰く『ザクイーラ様の愛の奴隷』……。

魔王城の人々は語る。魔術師団長に敗れる前はまともだったのに……と。

だが、この説得(?)は逆効果だった。

ユベロスの顔が悲壮感さえ漂わせながらきりっと引き締まり、鞭が一段と早くなる。

「陛下を逃がしたら……」

「逃がしたら？」

「『捨てる』って言われましたー！ーっ！！」

悲痛な叫びが響き渡る。

「さすがザクイーラ様、周到だなあ」

「ユベロスなら陛下に言いくるめられるって思ったんでしょねえ」

いつの間にやらふたりを取り囲んでいた近衛騎士達は、魔王を助けるでなく、ユベロスに手を貸すでもなく、のんびり観戦モード。

「お前ら！ ユベロスを止めろ！」

「「無理です」」

伊達にユベロスは最強と言われている。魔王だから避け切れて
いるのだ、あの鞭は。

「だいたい陛下が執務を放り出して脱走するから」

「俺はユベロスが出てこないように、魔術師団関係の書類は終わら
せたんだぞ？！ なのになぜこの馬鹿が出てくる？！」

基本魔王に忠実なユベロスは、たまの息抜きぐらいと魔王の逃亡
を見逃してくれる。が、ザクイーラの命令とあらば何としてでも遂
行する。そしてそのザクイーラも魔術師団に影響がなければ、わざ
わざ捕縛を命じたりしない。

「あ、宰相閣下がザクイーラ様に頼んできましたよ」

「何でもこの前チェスで勝って、『ユベロス1回使用権』を貰った
そうで」

「なんだとー！ー！ーっ！！」

「さあ陛下！ あきらめて私の愛の為に捕まって下さい！」

「なんでお前の愛の為に、俺が自由を諦めねばならんのだっ！！」

魔王の自由への道は、たぶんおそらく、少なくとも今日は、かなり遠い――。

「そろそろ捕まりそうですね……、ああ捕まった」

ふたりの視線の先に映し出されているのは、魔王捕縛の様子。丁度ユベロスの鞭が魔王を捕らえたところだった。魔王はそのまま鞭でぐるぐると縛られ、意気揚々としたユベロスの肩に担ぎ上げられた。

「陛下が本気になれば、あれぐらい容易く抜けられるだろうに」

魔術師団長特製の魔力封じが込められている鞭とて、魔王を封じきれものではない。

「本気になられても困りますよ？　ユベロスでも捕まえられなくなったら貴女の出番ですからね？」

苦笑したのは、女と見紛うばかりの繊細な美貌を持つ宰相。

それは面倒な嫌そうな顔をしたのは、片目を眼帯で覆いながらも、なお妖艶な魔術師団長。

強大な力を持つ故に魔王は細かい制御が苦手だ。平時は周囲に被

害を及ぼさないように、己の魔力を半分以上封印している。だから近衛騎士達でもなんとか捕らえられるのだ。

「書類を溜めなければ、わざわざ捕縛命令など出さないのですけどね……」

逃亡癖のある魔王に手を焼いている宰相は、悩ましげに溜息をつく。

「今回は貴女のおかげで助かりました。また時間のあるときに1局いかがですか？」

「『ユベロス使用权』を賭けて？」

「もちろん」

魔術師団長のチェスの腕前もなかなかのものだが、宰相の方がさらに強い。

「ご指南いただけるならば、喜んで」

にこりと微笑みあった宰相と魔術師団長は、喜色満面のユベロスが魔王を担いで戻ってくるまで、魔王の執務室で優雅にお茶を楽しんだ。

魔王城は今日も（極一部を除いて）平和である。

(後書き)

初投稿です。

ユベロスの名前は、チューベローズをもじってつけました。
チューベローズの花言葉…危険な快楽

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4455j/>

魔王城の日常

2010年12月14日20時58分発行